

小中屋文書

「手習い本に見る須納谷村の教育」展

橋爪直子

昨年4月から、本学文学部史学科開講の博物館実習が資料館で行われている。資料の扱いや展示に関することなど、様々な作業に学生が積極的に関わることができるよう心がけ、昨年10月には当館所蔵の「小中屋文書」を用いて学生が企画した展覧会が開催された（「白山麓幕府領の支配と生活」展、資料館共催）。

今回の展覧会も今春から実習を行ってきた学生が構成したもので、前回と同じ「小中屋文書」を使用しながらも、別の視点からテーマを定めた。

310点を数える小中屋文書は内容形態によっていくつかに分類されるが、その中では学芸分野の多いのが特徴で、これを今回のテーマとして取り上げた。この分野は先号において宇佐美孝氏（金沢市立玉川図書館・資料館客員研究員）が報告されており、今回の展示の参考とした（『「小中屋文書」の「手習本」分類史料の内容』、『資料館だより』No.9）。

目録中、手習い本及び雛形として分類される当該分野の文書は130点存在する。これらを展示ではさらに細かく分けてみた。

まず、読み書きの初歩的なものが挙げられる。文書中にあるいろは手本では、末尾に「京」、そして「一」から「十」までの数字表記が見られる。このような形はいろは手本の代表的な例である。

最も一般的な手習い本と言えるであろう往来物は、平安期から使われた書簡集の形を取る初等教育書である。往来物は文字や手紙文の書式のみを学ぶものではなく、その内容から政治・経済・文化など、様々な分野のことを学ぶ工夫がなされている。小中屋文書では宇佐美氏が指摘される通り、差出人や宛先、内容が須納谷村の日常生活に密着したものとなっており、また

庄屋である小中家の役割を確認するものとなっている。例えば、須納谷村が含まれる幕府領白山麓18ヶ村の各村をはじめとした近隣諸地域の名称が頻繁に現れるほか、林業、絹織物業など地域の重要な産業に関わる往来手本が多い。

さらに廻状と呼ばれる、村々が順次回覧していく形をとる文書の手習いがある。その中では代官交替に際した各村庄屋の招集、年貢割付や博奕禁止令のテキストなどがあり、村役人である小中家の役割をうかがわせている。

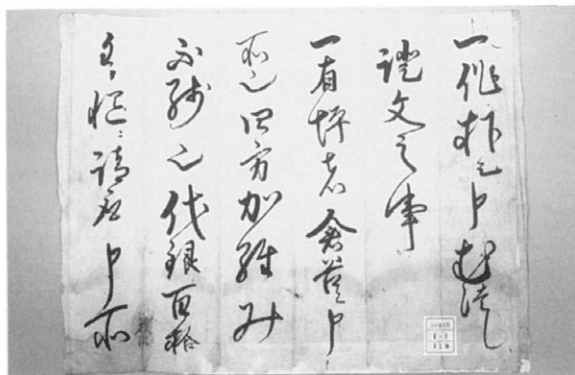
地域密着の型ではなく、おそらくいわゆる教養を高めるために使用されたものであろう文書も存在している。百人一首の持統天皇の和歌や、梶原景時の讒言によって失脚した源義経の発給した書状などが代表的なものであり、特に後者では義経が小中家の人間に宛てた形をとっている。読み書き、歴史教育の教本であるとともに、真偽はともかく、義経と関わりを持つ「小中家」の人間としての自覚を促す効果もあったのではないだろうか。

手習い本はこのように、現在の私たちにも当時の教育や地域の生活の実態を教えてくれるのである。

なお、本展覧会に関わる実習生は以下の通りである。阿部雄一・天野琴美・岡田 妙・石垣知倫・石黒園子・佐塚勝之・寺林泰昌・野澤恭子・原田亮男・樋本真希子・堀 好晴・室千奈美・山崎由紀子・渡辺佳代子。開催期間は1997年6月23日～6月27日（13時～16時）。展示に使用した文書は14点。その他、地図や江戸時代の教育について解説したパネル等を11枚展示した。また26日、27日には実習生によるギャラリートークを行った。（資料館）



会場風景 平成9年6月



「一作卸むつし証文之事」

展示品の一点。「むつし」は白峰地方特有の焼畑農法のこと。